

令和 6 年 9 月 11 日現在

機関番号：34534

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K10821

研究課題名（和文）Know-do gapを超えて倫理的ケアの実践を促進させる学習プログラムの開発

研究課題名（英文）Develop a learning program to promote ethical care practices across the know-do gap

研究代表者

片山 はるみ（KATAYAMA, Harumi）

姫路大学・看護学部・教授

研究者番号：90412345

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：ハイパフォーマーを対象としたインタビューによって得たデータを質的帰納的に分析して22項目の倫理的ケアリングコンピテンシー（ECC）を明らかにした。ECCの22項目をリッカートスケールに構成して尺度としての信頼性・妥当性を評価し、倫理的ケアリングスケール（Ethical Caring Competency Scale; ECCS）を開発した。加えて、ECCを用いてエキスパートクラス、ミドルクラス、ビギナークラスの3段階ルーブリック評価票を構築した。また、ECCを育成するための学習プログラムを開発して協力病院の看護職者を対象に5年間実行し、その効果を検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

開発した倫理的ケアリングスケール（Ethical Caring Competency Scale; ECCS）は看護職者だけではなく他の医療従事者にも適用できる可能性がある。またECCSは現在日本語、英語、トルコ語、中国語等の多言語に翻訳され、多文化での適合性が検証中であり、国際的にも活用可能であり、多国間の特徴を比較検証する発展的研究が期待できる。

研究成果の概要（英文）：Data obtained from interviews with high performers was qualitatively and inductively analyzed to clarify 22 ethical caring competencies (ECCs). The 22 items of the ECC were configured into a Likert scale, the reliability and validity of the scale was evaluated, and the Ethical Caring Competency Scale (ECCS) was developed. In addition, a three-level rubric evaluation form for expert class, middle class, and beginner class was constructed using ECC. In addition, a learning program to develop the ECCs was developed and implemented for five years for nursing professionals in cooperating hospitals, and its effectiveness was verified.

研究分野：看護倫理

キーワード：看護倫理 ケアリング倫理 コンピテンシー ルーブリック評価票 プログラム開発

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 医療・社会環境の変化

医療技術の進歩や人々の権利意識の高まり、また価値観の多様化などにより、医療・福祉の現場ではニーズの多様化が生じている。また超高齢社会にある現在、認知症高齢者・精神障害者等の個人の権利を擁護し、尊厳を守りながらケアを提供することが困難な状況が社会問題として顕在化しつつある。さらに、安全・安心な医療の提供を目指して平成 27 年に医療事故調査制度が施行されるなど、医療安全対策の強化が進んでいる。

(2) 看護職者の倫理に関する現状

このような背景の中、看護職者は様々な倫理的問題に直面している。小川ら (2014) が挙げた「臨床看護師が体験している倫理的問題」に示されるように、我が国の看護職者が体験している倫理的問題は多岐にわたる。中でも身体拘束や胃瘻等の人工栄養の是非にかかわる議論は、医学的判断や医療安全対策の遂行と対象者の尊厳を守ることとの板挟みになっている看護職者にとって、広く先進国における共通の課題であると同時に日常的な問題でもある。ところが、多忙を極める日常業務の中では倫理的問題を十分に検討したり実践力を向上させたりする余裕は少なく、「患者の関わりへの自責の念」「主体的な問題関与からの回避的志向」「考えの違うものや現状にもつ否定的な感情」などの状況 (村田, 2012) に陥って悩む看護職者も多い。また、「道徳的感受性」が高い臨床看護師は疲労が強い (米沢, 2013) という報告もある。

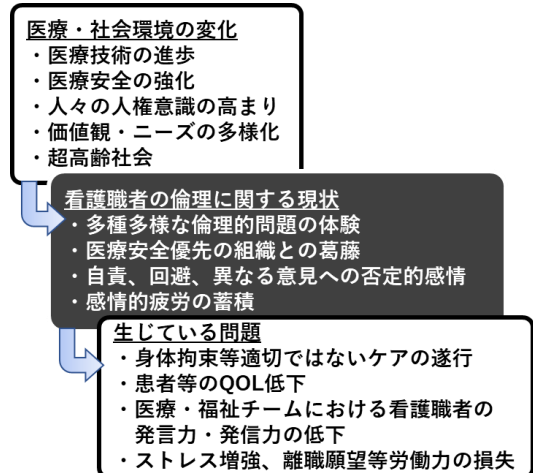


図1. 看護職者の「倫理」をとりまく問題の背景

(3) 生じている問題

このような現状により、医療保険適用病床の 90%以上で身体拘束が行われている (日本病院協会, 2016) など、医療・福祉の現場では目先の安全のために適切とは言えないケアが当たり前に行われ、その結果として患者等の QOL (Quality of life) が低下し、看護職者のやりがいの低下やストレスの増強にもつながるような問題が生じている (図1)。

2. 研究の目的

看護職者に潜在している“Know-do gap”を超えるためにシミュレーション教育、ケース・メソッドや描画法等、認知や行動の変容を促進させる教育手法を取り入れてプログラムを改変するとともに看護管理者と共同して PDCA (plan-do-check-act) サイクルによって運用し、また看護職者アウトカム、患者アウトカムの2段階の評価システムを新たに構築して統計学的に検証することであった。

3. 研究の方法

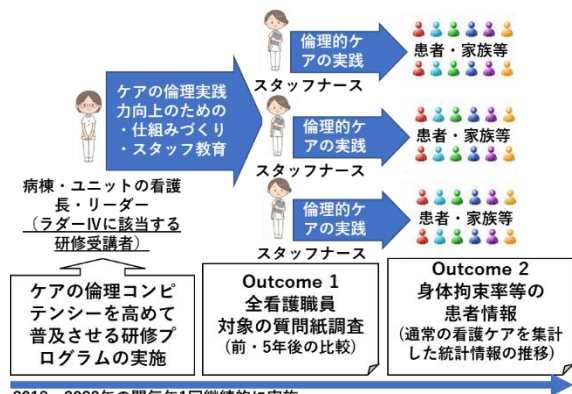
研究は浜松医科大学臨床研究倫理審査委員会の承認を得て実施した

① 質問紙・患者二次データ

研修プログラムの実行

2018年より、概ね8月ごろ、病棟やユニットなどの長・教育担当者を対象に研修プログラムを提供中である。受講者は各自の部署において倫理的ケア実践力向上のための「仕組みづくり」や「スタッフ教育」等を中心とする業務改善計画書を作成し、実行する。その成果をフォローアップ研修で発表し、更なる改善を試みる。この PDCA サイクルは既存の看護管理計画の中に組み込まれているので対象医療機関に特段の負担を与えることなく継続して実施した。

対象者は、令和4年度の研修が終了する令和5年2月17日以降で質問紙調査が可能な任意の2週間程度の間、対象病院に勤務しており、出勤している (長期休暇や退職者を除く) 常勤の看護職員 (保健師、助産師、看護師の有資格者)。既存の質問紙調査は2018年5月中旬に実施され、この期間に対象病院に勤務しており、出勤している (長期休暇や



2018~2022年の間毎年1回継続的に実施
図3. プログラムの実行と量的データ収集の概略

【1 研究目的、研究方法など (つづき)】

休職者を除く) 常勤の看護職員 (保健師、助産師、看護師の有資格者) であった。

質問紙を用いる全看護職員の評価内容:

ECCS(Ethical Caring Competency Scale)を含め、年齢、性別、経験年数等の基本情報、身体抑制認識尺度、看護師の仕事意欲測定尺度、せん妄等に対する看護ケア実践の取り組みに関する質問等、認知・行動の両側面の質問から構成される評価票を用い、学習プログラム実施時 (対象医療機関が保有する既存データ)、5年後 (今回新規に得るデータ) を収集した。既存データ取得時と同じ無記名自記式調査票を用いた。今年度新規に得るデータは、フォローアップ研修が終了する2月に実施した。回答時間は約10分であった。いずれの尺度も自作か論文で公表されていて信頼性・妥当性が検証済みで、使用可能なものであった。

通常の看護ケアを集計した統計情報による評価:

患者数、実働看護職員数、看護度、転倒転落件数・率、身体拘束実施件数・率、IC 同席数・率等、電子カルテから病院が定期的に集計している個人に紐づかない通常の看護ケアを集計した統計情報を遡及的に得た。

② インタビューデータ

良好な成績を上げていると評価されている複数のモデル病棟の看護長とスタッフナースを対象にインタビューを実施した。内容は身体拘束低減への取り組みに関する効果と課題、医師が患者に実施するICへの同席推進の取り組みに関する効果と課題などについて、具体的なエピソードを聞いた。看護長などの管理職の職位にある者数名と看護スタッフ数名を対象とした。インタビューの時期は、対象病院である浜松医療センターの都合に合わせて、9-10月ごろ実施した。インタビューにかかる時間は20-30分を想定しているが、対象者の都合に合わせて調整した。対象病院に浜松医科大学の研究者が出向いてインタビューを実施する。そのさい、静穏な個室を借用し、個別に正確を期すための録音の許可を得た。

4. 研究成果

Outcome1 について、学習プログラムの効果が見られていた。プログラムの実行前後を比較したところ、身体抑制認識得点、ECCS の合計得点と全ての下位尺度において、有意な改善が見られていた。このことは、研修を受けた「レベルIV」の看護師が自部署でPDCAを実践することによってスタッフに波及効果をもたらされたことを意味している。

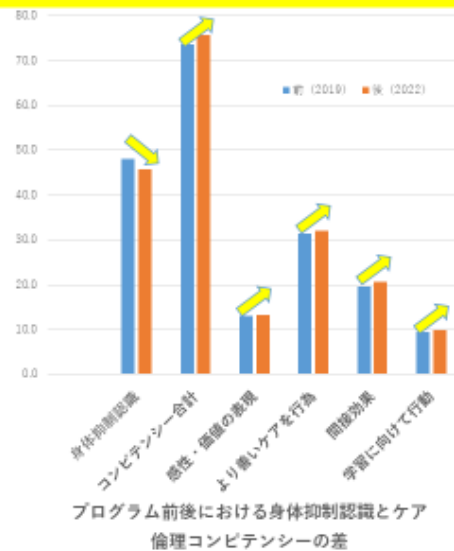
Outcome2 については、研究期間中 Covid-19 の流行があり、大きなバイアスとなったため正確なデータが得られていない。またインタビューデータについて、現在も継続して分析中である。

学習プログラムの効果を確認

プログラム前後における身体抑制認識とケア倫理コンピテンシーの差

	プログラム前後				p-value*
	前 (2019)		後 (2022)		
	n=446	n=314	n=314	n=314	
身体抑制認識 (17-85)	48.1	11.75	45.7	11.87	0.003
コンピテンシー合計 (22-110)	73.6	10.18	75.8	11.40	0.003
感性・価値の表現 (4-20)	13.0	2.01	13.4	2.12	0.009
より善いケアを行為 (9-45)	31.4	4.41	32.0	4.78	0.044
間接効果 (6-30)	19.7	3.81	20.7	3.93	<.0001
学習に向けて行動 (3-15)	9.5	2.03	9.8	2.15	0.029

*Independent-samples t-test
カッコ内の数値は得点の最小値と最大値



- 研修はレベルIVの看護師が対象
 - PDCAで自部署に還元
 - データは全ての看護師 (同意の得られた) を対象
-
- 波及効果が見られている
 - レベルIVの看護師は職場風土醸成の要であることを再確認

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 片山はるみ、村松妙子	4. 巻 13
2. 論文標題 看護実践における倫理的ケアのコンピテンシー評価票原案の作成	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本看護倫理学会誌	6. 最初と最後の頁 3-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32275/jjne.20200501	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 1) 村松妙子、片山はるみ	4. 巻 13
2. 論文標題 看護学生の倫理的感受性質問票（ESQ-NS）の有用性の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本看護倫理学会誌	6. 最初と最後の頁 32-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32275/jjne.19015	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Katayama Harumi、Muramatsu Taeko、Aoki Yoshimi、Nagashima Eri	4. 巻 21
2. 論文標題 Psychometric evaluation of the Ethical Caring Competency Scale in nursing	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 BMC Nursing	6. 最初と最後の頁 2-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s12912-022-00886-2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 村松妙子、片山はるみ
2. 発表標題 ディベートを取り入れた看護倫理教育の教育効果の検証
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Katayama H, Muranatsu T, Suzuki M, Aoki Y, Nagashima E
2. 発表標題 Verification of the possibility of the difficulty ladder construction of the ethical competency in clinical nurses
3. 学会等名 23rd East Asian Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 片山はるみ
2. 発表標題 倫理的ケアのコンピテンシーの統計学的検討(第1報)ーラダーの構成可能性の検証ー
3. 学会等名 日本看護倫理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片山はるみ、岩品希和子、神谷有里子、鈴木美恵子
2. 発表標題 A病院における身体拘束低減の取り組みと成果に関する統計学的検証
3. 学会等名 日本看護管理学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 片山はるみ
2. 発表標題 倫理的ケアのコンピテンシーの統計学的検討ーラダーの構成妥当性の検証ー
3. 学会等名 日本看護科学学会誌
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KATAYAMA Harumi, MURAMATSU Taeko, SUZUKI Mina, AOKI Yoshimi, NAGASHIMA Eri
2. 発表標題 Verification of the possibility of the difficulty ladder construction of the ethical competency in clinical nurses
3. 学会等名 East Asian Forum of Nursing Schokars (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 美奈 (SUZUKI Mina) (40622824)	浜松医科大学・医学部・准教授 (13802)	
研究分担者	村松 妙子 (MURAMATSU Taeko) (90402255)	浜松医科大学・医学部・助教 (13802)	
研究分担者	水嶋 好美 (青木) (Mizushima Yoshimi) (70781376)	浜松医科大学・医学部・助教 (13802)	
研究分担者	鈴江 毅 (Suzue Takeshi) (70398030)	静岡大学・教育学部・教授 (13801)	
研究分担者	中村 美智太郎 (Nakamura Michitarou) (20725189)	静岡大学・教育学部・准教授 (13801)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐々木 菜名代 (Sasaki Nanayo) (90816464)	浜松医科大学・医学部附属病院・看護部長 (13802)	
研究分担者	岩品 希和子 (Iwashina Kiwako) (00876360)	浜松医科大学・医学部附属病院・副看護部長 (13802)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関